

新たな不登校が生じない取組 「未然防止」の取組

不登校が生じない魅力ある学校・学年・学級づくりの推進

【取組1】(A中学校)

始業式及び入学式の翌週を中心に、全学年で担任との二者面談を、休み時間や放課後を利用して実施した。入学や進級で新しい環境に不安を感じている生徒にいち早く気付き、また相談しやすい人間関係づくりを目指した。担任にとっては新学期の生徒の様子や情報を得ることができ、生徒の不安の解消につなげることができた。また、面談の実施は、事前に保護者へ連絡しており、家庭との連携を図る契機になる取組であった。面談を実施後には、生徒の情報が学年で共有され、各教科の授業や学校生活での支援にもつながり、生徒にとって安心して登校できる校内体制を構築できた。

【取組2】(A中学校)

生徒会主催で新入生オリエンテーション(委員会・部活動紹介)を実施した。生徒会や各委員会、部活動の紹介が行われ、新入生への仲間意識や生徒一人一人の活躍の場の紹介が行われた。上級生が新入生を歓迎していると感じられる場面を、各委員会や部活動の紹介の中に取り入れるように工夫しており、新入生が中学校の一員として迎え入れられた雰囲気を感じることができるようになっていた。この取組は、新入生が学校生活に期待をもつことができる取組にもなった。



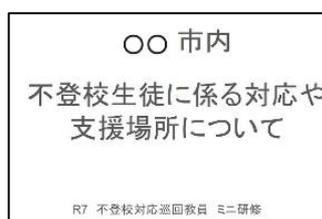
【取組3】(B中学校)

学校の重点目標として掲げられた「心理的安全性の向上」について、始業式、入学式、全校朝礼で校長から生徒に説明があった。その後、各学級で「心理的安全性」をテーマに話し合い、「自分にとっての心理的安全性」を考えさせることで、自らすすんで考える場面を作り、意見交換の中で共感的な人間関係が育まれていた。



【取組4】(C中学校)

「市内の不登校に係る対応や支援場所」をテーマに、市内の不登校対応巡回教員と共同でスライド資料を作成し、全ての巡回担当校で研修を行った。市内の相談先や支援先、生徒の居場所となる関係機関を、各学校の教職員に周知することができた。教員は、スライド資料を活用し、夏季休業日に行った三者面談の際に、保護者に提示して周知するなどの取組が見られた。



多様な学びの場を確保する取組

〔「早期支援」及び「長期化への対応」の取組〕の推進

支援会議（D中学校）

管理職、特別支援教育コーディネーター、生活指導主任、学年主任、特別支援教室専門員、SC、SSW、不登校対応巡回教員で週1回、情報を共有している。生徒の状況に応じて、デジタル教科書を活用した学習の支援や定期考査における合理的配慮の支援の方法も検討され、未然防止に資する取組が実施された。

アウトリーチによる支援（C中学校）

欠席が長期化している生徒の家庭訪問をSSWが月1回以上実施し、生徒や保護者の状況に合わせて学校内外の情報提供を行ったり、生徒の状況の確認を行ったりしている。SSWが継続して支援している生徒が、校内別室等で学習するために登校できるようになった事例もあった。

校内別室における支援（B中学校）

校内別室を誰もが居心地の良いと思える環境に整備し、常時1人の支援員が、生徒の様子を見守っている。支援員は、校内別室を利用している生徒の活動の様子を記録し、積極的に声掛けを行っている。学習に意欲のある生徒については、本人が取り組む学習課題を教員と相談して計画し、校内別室からオンラインで授業に参加することができるように工夫し、自己決定の機会を設け、学習内容や方法を支援している。また、学校行事には、校内別室を利用しながら参加できるようにして、学校や学級に所属している意識を感じられるように支援している。



デジタル機器を活用した支援（B中学校）

校内別室または自宅で、オンラインにて授業を受けられるように、教室にオンライン配信用の端末を1台用意し、生徒の希望する授業の際に授業支援ツールを使ってつないでいる。教室に入りづらい生徒も授業に参加ができて



関係機関との連携（D中学校）

SSWは、学校に登校できていない生徒の家庭訪問だけでなく、NPO法人による地域の居場所や入院中の病院で生徒と面会を行っている。こうした生徒の様子を、校内委員会を通じて情報共有し、学校とのつながりが途切れることがないように、連携を意識していきたい。

成果

生徒一人一人の状況に応じた教育活動や居場所の提供により、安心・安全な風土の醸成が行われた。このことで生徒同士の理解が進み、共感的な人間関係の育成につながっている。

課題

各教科の授業や特別活動の中で、不登校の未然防止につながる取組(学習内容や量の調整等の自己決定の場の提供)の実施や改善。